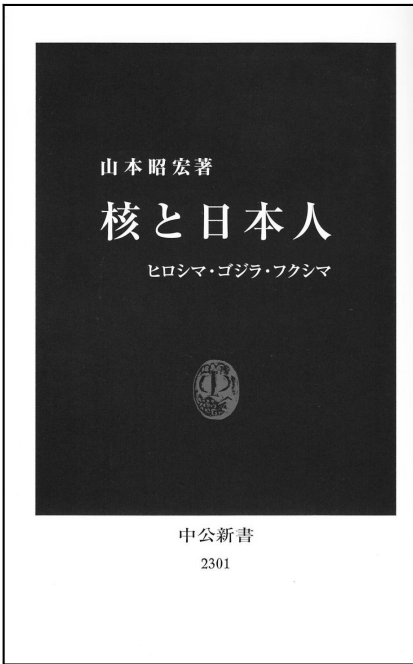


# 山本昭宏著 『核と日本人——ヒロシマ・ゴジラ・フクシマ』

高山智樹



「ニュークリア」という言葉が日本語に訳されるとき、それが兵器として利用される場合は「核」と翻訳されるのに対し、それが電力として利用される場合は、しばしば「原子力」と翻訳される。こうした二面的な態度が、「核の軍事利用」と「原子力の平和利用」とを、無理にでも峻別しようとしてきた戦後日本の状況を端的にあらわしていることは言うまでもない。

既に幾つかの研究で明らかにされている通り、この「核」と「原子力」との区別は、一九七〇年代から一九八〇年代にかけての反核運動をはじめ、様々な場面において次第に問題視されるようになってきた。しかしながら、その二面的な態度そのものを問い直し、そこで区別される二つのものがどのような関係に置かれてきたかを検討するような作業は、長い間行われないうままであった。

そうした状況が変化したのは、もちろん二〇一一年三月一日に起こった東日本大震災とそれに伴う福島原発の事故によつてである。川村湊『原爆と原発』（河出書房新社、二〇一一年）や吉見俊哉『原子力の夢』（筑摩書房、二〇一二年）など、「ニュークリ

ア」に対する日本社会の二面的な態度を、さらにはそれによって生み出された状況そのままで描き出そうとする研究が、事故後に次々と発表されてきた。言説分析によって、戦後日本社会における「核エネルギー」をめぐる言説の配置状況を明らかにした山本昭宏『核エネルギー言説の戦後史 1945-1960』（人文書院、二〇一二）も、そうした流れを代表する一冊である。そして山本はその後、時間軸をさらに長くとり、取り扱う対象の幅もより広くし、戦後日本の「核」をめぐる言説状況をトータルとして描き出そうとする試みを行った。それが、二〇一五年に出版された、『核と日本人』（中央公論新社）である。

『核エネルギー言説の戦後史』と同様に、『核と日本人』の中心にあるのは、戦後日本社会が抱えてきた、「核の『軍事利用』を否定し『平和利用』を肯定するという二面性」（二四七頁）である。その二面性はさらに、一方では「広島・長崎の死者を悼み、核兵器やその保有国を憎みながら、『核の傘』の下で日本は核兵器の標的になることはないだろうと、さしたる根拠がないままにどこか樂觀している」（二四八頁）という、「軍事利用」に関する「二面性」に連なり、他方では「原発や原子力施設の事故などを経験しそれらが危険であることを知りつつも、すでに稼働している原発についてはその存在を容認する」という、「平和利用」に関する「二面性」に連なっている。

『核と日本人』で山本が描き出しているように、こうしたいくつもの二面性、そしてその二面性を構成する様々な要素が、互いに複雑な関係を作りだしながら、戦後日本社会を規定してきたのは間違いない。「平和国家」というアイデンティティを掲げ、戦

争に対する強い忌避感を持ちつつ、多くの日本人は「核の傘」に守られているという現状を受け入れ、「非核三原則」が実質的に履行されていない状況をも黙認し、保守勢力が核配備を含めた再軍備を虎視眈々と狙いながら、憲法九条を段階的に骨抜きにすることを許してきた。同時に、「平和国家」の一つの基盤として「被爆体験」を持ち、世界でも稀にみるレベルでの放射能による被害を被りながらも、日本社会は原子力発電を一貫して推進し、やはり世界でも稀にみるレベルでの原発災害に遭いながら、依然として原子力発電への依存をやめようとはしないのである。

二〇一六年四月に起こった熊本・大分地震に際して、震源近くに位置する川内原発の即時停止を求める声が散発的に上がったものの、政府・マスコミがそうした声には一切耳を貸さず、「安全性に問題はない」という態度を貫き通したことは記憶に新しい。またその間も、玄海原発や伊方原発の再稼働に向けた手続きは着々と進められてきた。山本も指摘している通り、未曾有の事故によって、戦後の原子力政策を支えてきた「安全神話」が破綻した後も、あたかも、被爆経験があるからこそ、日本は原子力エネルギーを正しく使えるという戦後日本の特徴的な言説を反復するかのように、「原発災害を経験したからこそ、原発を安全に運転することが可能なのだ」（二四九頁）という新たな「神話」が、日常を支配している。そして他方、山本が朝日新聞のインタビューに答えて指摘しているように、原発事故の経験が「被爆の記憶」とつながり、「広島・長崎を捉え直す」動きが出てくるといった事態は起きていないのだ（「広島と核をめぐる意識」『朝日新聞』二〇一六年五月二八日付朝刊）。

いくつもの「二面性」を重ねることで作られてきた、現在にまで続くこうした矛盾に満ちた状況の中では、社会全体として「核エネルギー」とどう向き合うかという、本質的な問いには決して触れられることがない。被爆・被曝のリアリティは想像力の枠外に置かれてしまったため、「軍事利用」に関する「二面性」においても、「平和利用」に関する「二面性」においても、当事者意識は希薄となる。山本が明示的に語っているわけではないものの、『核と日本人』の描写から浮かび上がってくるのは、「核エネルギー」に対するこのような曖昧で不誠実な態度である。むしろ、人びとがそうした曖昧で不誠実な態度にとどまり続け、根本的な問題提起が行われることを避けるためにこそ、いくつもの「二面性」が日本社会に張り巡らされているようにすら思えてくる。

山本は、ピキニ環礁における第五福竜丸の被曝、公害問題、日本国内外での原発事故などのいくつかの事件が、日本社会において「核エネルギー」をめぐる言説の「画期」を作り出し、何らかの態度決定を迫ってきたこと、しかしそれにもかかわらず、形を変えながらも「二面性」が一貫して保持されてきたことを繰り返して指摘しているが、それはむしろ、どの「画期」においても根本的な問題提起が行われず、曖昧で不誠実な態度が維持され続けてきたということではないのだろうか。

おそらく、そうした態度をもっともよくあらわしているのが、多くのポピュラー文化に見られる「核」の取り扱い方である。『核と日本人』の大きな特徴は、それが論壇・知識人の言説やマスコミ報道にとどまらず、映画やテレビ番組、さらにはマンガにまでいたるポピュラー文化の表象までを、その分析の対象としている

ことなのだが、そうした表象が社会のなかで、ないしは言説状況のなかで、どのような位置を取るのかについては、明確な説明がされていない。しかしながら本書の記述からは、ポピュラー文化における「核」の表象の幾つかが、日本社会と「核」との関係を、ある意味もつともあからさまで直接的な形で描いているとすら見て取ることができるのである。

本書が紹介している通り、「ピカドン兄さん」「原爆投げ」「原子力発電パンチ」のように、あくまで「破壊力」（一四頁）を強調する記号としての「核」の利用や、『放射能＝能力や身体の変異』という短絡」に基づき、「被爆や被曝による超能力の発現という設定」（七五頁）、さらには冒頭に核戦争を置き、物語世界を「核戦争後」の世界として設定する「舞台設定」（一七六頁）としての「核戦争」の利用など、日本のポピュラー文化においては、しばしば単なる記号として、ないしは物語を駆動させるための単なる仕掛けとして、「核エネルギー」が利用されてきた。それらはいずれも、幾重もの「二面性」によって保証された、「核エネルギー」に対する曖昧で不誠実な態度のあらわれ、ないしはそれを実際に構成しているものと見ることができないのではないだろうか。ほとんどのポピュラー文化における「核」の表象において、放射能汚染や放射能障害などについて一切触れられることがないというのは、非常に象徴的であろう。実際、山本自身、「世界をリセットしてくれる」「装置」としての「核戦争」を利用することが、一九八〇年代に流行したことについて、「戦後日本の核に関する意識とポピュラー文化との関係が辿り着いた一つの極点であった」（二七六頁）と述べている。そうした「仕掛け」があら

わしているのは、「核兵器が世界に壊滅的打撃を与えると理解していても、そこに現実的な恐怖や危機を感じる事ができないという、異なる意識の併存」なのであった。ここではまさしくポピュラー文化が、戦後日本を覆っている「二面性」、そしてその「二面性」によって守られた曖昧で不誠実な態度をはつきりと形象化しているのである。

もちろん、こうしたことを説得的に述べるためには、より詳細なポピュラー文化の表象・言説分析が必要である。先にも指摘した、言説状況全体のなかでのポピュラー文化の位置づけはもとより、ポピュラー文化内部での、表象・言説の力学や構造、またその連続性などについて、さらなる考察が行われなくてはならないだろう。もとよりそれらが新書という媒体の容量をはるかに超えており、今後の課題であるのは言うまでもない。

また今後の課題としてさらに付け加えておけば、ポピュラー文化にかぎらず、様々な言説の配置状況と、さしあたりはその外部にある社会関係・権力関係との両者が、どのような関係に置かれているのかという点について、さらなる議論を重ねれば、こうした言説分析はより奥行きを増すはずである。例えば、日米関係が言説に及ぼす影響といったことは、「核エネルギー」の問題を考える際には避けて通れない論点であろう。実際、先に触れた山本へのインタビューは、二〇一六年五月にアメリカの現職大統領として初めて、オバマ大統領が広島を訪問した際に行われたものであり、そこで山本は、オバマ大統領が原爆投下への謝罪はおろか、その是非についても何も語らず、またそうしたオバマ大統領の姿勢を批判する声はさほど聞かれなかったことを批判しつつ、

以下のように述べていた。「オバマ大統領の広島訪問は、核に對しての生産的な議論をするためのきっかけになる可能性をもっていました。その貴重な機会を現状では生かされていないのではないでしょうか。多くの日本人が、オバマ大統領の広島訪問に際して、きわめて曖昧な態度を取り続けたことは印象的であったが、それもおそらく、戦後日本のアメリカとの関係においても、強固な「二面性」が存在してきたことの一つのあらわれであろう。そして言うまでもなく、その「二面性」は核エネルギーをめぐる「二面性」と深い関係を取り結んでいる筈なのである。『核と日本人』が、これから続いていくであろう、より幅広い戦後日本の精神史研究の出発点となることを期待したい。

(二〇一五年一月二五日 中央公論新社 二六六頁 八八〇円＋税)